

【氏名】中野 幸男

【所属大学院】（助成決定時） 東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】

反体制を超えて～1970年代ロシアにおける文化変容～

【研究の目的】

本研究の目的は、ソヴィエト体制内で派生的に発生した「反体制的」表現形式（地下出版（サミズダート、国外出版（タミズダート）、イソップの言語（内輪での含意的表現））のもとで言論活動を行ってきた文化人がその創作活動において、ペレストロイカ後のソ連でどのように新しい表現形式に影響を与え、「体制」と一対になって表現された「反体制」がいかに変形されたか（ノスタルジー、愛国主義など）を研究するものである。本研究の学術的意義は、時間的制限から同時代的には研究の枠に入らなかった視点であり、入手可能な回顧録、アーカイブ資料などを用いつつ、亡命者達の多様な側面、帰国に関する選択、前亡命世代との確執、亡命居住地の都市間格差などを考慮に入れつつ、「第三の波」70年代ロシア亡命者たちの多様な選択を考察するものである。

【研究の内容・方法】

研究計画について述べるならば、継続的に行われる研究であり、これまで申請者は大学院生としてモスクワ大学に在学中ソルジェニーツィンと並ぶ「第三の波」亡命者の代表的な極であったアンドレイ・シニャフスキーについて博士論文を執筆し、「第三の波」亡命ロシア人の社会の中心人物の一人であるシニャフスキーについての研究は継続的に進められている。研究の残りの焦点は70年代中盤からシニャフスキーとロシアの文化・政治に関わる論争を繰り広げることになるノーベル賞作家アレクサンドル・ソルジェニーツィンに向けられ、研究はこの亡命ロシアの二つの極となる作家に焦点を当てながら、70年代のロシア亡命文化の言説を現在への影響という観点から読み解いていく。また、この二つの極は単に、リベラルと愛国主義という紋切り型のみならず、ロシア亡命者の選択肢として、先行亡命世代とのかかわり、文学者の政治との関わりにおいてある対照を成している。具体的な研究計画は以下の3つに分けられる。第一にロシア国内の先行文献の包括的調査にあたり、第二にアーカイブを中心としたロシア国外の文献調査、第三にそれらを踏まえたうえでの論文執筆およびその公刊という手順を踏む。計画遂行時期に関して、第一期は現在の研究を踏まえ継続的に行われ、第二期は2006年9月以降、準備が整い次第該当資料を調査する。第三期は、2007年4月以降、ロシア等で開かれる国際学会に合わせ準備される。研究方法に関しては、上記の計画に基づき、3種類のアプローチが考えられる。70年代ロシア亡命文化を再構築する作業は、同時に、70年代ソヴィエト文化のみならず、同時期の亡命先の文化の再構築であり、現在から亡命文化を分析する視点の問題が相関的に形成される。その意味で、先行・後攻する文化との時間的相関、地理的相関、また、とりわけ「第三の波」亡命文化と深く関わる人種的相関から分析が行われる。

【結論・考察】

本研究の結論は以下のようにまとめられる。1970年代の亡命作家間の諸問題は、亡命し離れる祖国との関係のみならず、アメリカやフランスなどの亡命先での、先に亡命してきた先行世代間との衝突として現われた。いわば、「第一の波」及び「第二の波」の持つ亡命理由と祖国との距離感覚にたいする齟齬が、70年代「第三の波」世代への潜在的な問題として存在していた。70年代のシニャフスキー『プーシキンとの散歩』における詩人冒涇論争も、先行世代のゲーリや世代的には「第三の波」であるソルジェニーツィンなどの反発とともに、後のゲニス、エプシュテイン、エロフェーエフ等の評価を一つの線として見るならば、ペレストロイカ後のロシアの愛国主義者とリベラリストの関係の青写真を描き出していた。以上の研究内容はロシア語論文及び国際学会発表にまとめられた。